

小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』翻刻稿(三)——玉鬘巻〜真木柱巻

小城鍋島文庫研究会

白石 良夫・日高 愛子・亀井 森・沼尻 利通・大久保順子
村上 義明・脇山 真衣・二宮 愛理・片桐 美優・溝内 菜央

佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫に所蔵される『十帖源氏』(函架番号〇

ある。

(日高)

九一―九)は、現存する『十帖源氏』版本のなかで最も早い時期に刷られたもので、著者である野々口立圃ののぐちりゅうほの直筆奥書が附される点でも極めて貴重な資料である。各冊尾に、肥前小城藩第二代藩主鍋島直能なほまおのよ(一六二二―一六八九)の「藤」(陰刻方印)の印が捺されていることなどから、立圃から直能に贈呈された可能性が高い。また、立圃の筆跡と思しき墨筆での書入れが施されているほか、朱筆の書入れも随所に認められる。この朱筆の書入れは直能による可能性が考えられる。詳細については、「小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』翻刻稿(一)―序〜葵巻」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第二十集第一号(二〇一五年八月)の解題を参照されたい。

註

「小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』翻刻稿(一)―序〜葵巻」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第二十集第一号(二〇一五年八月)、「小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』翻刻稿(二)―賢木巻〜少女巻」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第二十集第二号(二〇一六年二月)。

翻字分担

玉鬘(村上義明) 初音(亀井森) 胡蝶(脇山真衣) 螢(二宮愛理) 常夏(片桐美優) 篝火(日高愛子) 野分(溝内菜央) 行幸(白石良夫) 藤袴(沼尻利通) 真木柱(大久保順子)

※原稿の作成に際して、各巻の翻字担当者に加え、中尾友香梨(佐賀大学准教授)・三ツ松誠(佐賀大学講師)・土屋育子(東北大学准教授)・河野未弥(大分県立杵築高等学校講師)が点検を行った。

小城鍋島文庫研究会 (<https://sagakoten.jimdo.com/>) では、これまで、第一・二冊、第三・四冊をそれぞれ翻刻紹介してきた。^註 本稿では、その続きとして、第五冊を翻刻する。

なお、本稿は平成二十八年年度科学研究費・基盤研究(C)「地域の文化財群としての小城鍋島藩蔵書の研究―その全貌の解明と具体例の分析―」(研究代表者〓中尾友香梨、課題番号15K02251)による研究成果の一部で

凡例

- 一 本稿は、佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』甲本（函架番号〇九一―九）の翻刻である。今回は第五冊を収録した。
- 一 版本・墨筆書入れ・朱筆書入れ、いずれも漢字・仮名の区別は底本を再現し、現行の字体を用いた。仮名遣い・濁点についても底本の通りに従った。
- 一 虫損等によって読み難い箇所は、版本については甲本と同じ初版本である古典文庫影印本によって、書入れについては小城鍋島文庫乙本によってそれらを補った。
- 一 版本については、以下のような処理をした。なお、挿絵はこれを省略した。
 - (1) 行移りは底本の通りに従い、丁移りの箇所に丁数（オモテ・ウラ）を示した。
 - (2) 割書き・小字はポイントを落として「」内に一行書きした。
- 一 墨筆書入れ（頭注・脚注）については、以下のような処理をした。
 - (1) 各頁の末尾にまとめた。
 - (2) 版本本文の被注箇所に傍線を付し、それと対照できるように番号をつけた。
- 一 朱筆書入れについては、以下のような処理をした。
 - (1) 書入れ箇所に「」で括って示した。
 - (2) 濁点の補足は、傍らに「」を付した。
- 一 その他、固有の処理をしたものについては翻刻者による註記を付した。

【第五冊】

玉かつら

はつね

こてふ

ほたる

とこなつ

かゝり火

野わき

みゆき

ふちはかま

まきはしら 「(イオ)

(白紙) 「(イウ)

玉鬘 [源卅五才 以歌]

年月へたゝりぬれと夕かほの事わすれ給はず

右近をかたみとおほしてたいの上の御かたにさふら

はせ給へり西の京にとまりし姫君は御めのとのお

とこ少式に成て四才のとしつくしにぐしていきける

舟のうちにて むすめ二人の歌

舟人もたれをこふとかおほしまの

1 仁明天皇承和元年七月勅ニシテ諸国ノ守介志以四年可_レ為_レ限但陸奥出羽

太宰府是ヲ云官国

うらかなしけにこゑのきこゆる
こしかたもゆくゑもしらぬ沖に出て

あはれいつくに君をこふらん

つくしひせんにくたりてもうへをこひなきて此君玉かつら」(2才)

をかしつき奉る夢に見え給ては名残心ちあし

ければ世になく成給にけるなめりとのみ思ふ少武

任はて、のほりなんとするにをのこ子三人あるに此

君玉を京京におめて奉りてさるへき人にもしらせ奉れ

といひて姫君十はかりの頃少武はうせぬ京の立

をするに中あしき国の人おほくてをぢは、かり

年月を過す姫君のかたちよきを聞てゐなかな

ともせうそこめのと詞かれといみしきかたわのあれは尼にな

して我よのかきりはもたらんといふ也むすめものを

こも所につけたるよすがとも出きて京の事はいや

遠さかるやうにて姫君廿はかりに成給ふ頃ひごの舟才詞也」(2ウ)

国に大夫の監舟才詞也とていきほひいかめしきつはもの

ありすき心ありて此君かたわありとも見かくして

もたらんとねんころにいひてをして此国に來り

ぬ二郎と三郎はゆくすゑ身のよるべとたのもし

くてこれにおもむきけり少才ぶん少才この介といひしは

少武のいひし事もあれは京にのほせ奉らんといふ此

2 誘イテ

3 せうそこ 伝へたかれと也

監二郎をかたらひとりぬ心をやぶらしとてめのと
出て監にあひたりかたわなりともわたくしの君
とおもひていたゞきにさ、げんといふ 監

「へ」君にもし心たかは、まつらなる

か、みの神をかけてちかはん」(3才)

(挿絵)」(3ウ)

めのと心をもちひかへて

年5をへていのるこ、ろのたかひなは

か、みの神をつらしとや見ん

都整詞の人とても何はかりかあらんあなづりそ四月

廿日の程にむかへにこんといひてかへりぬふんこの介

と兵部の君といふむすめそひてよるにげて舟に

のりけり 兵部の君

う6きしまをこきはなれてもゆくかたや

いつくとまりとしらすもあるかな

「玉かつら」ゆくさきもみえぬなみちに船出して

風にまかする身こそうきたれ」(4才)

(挿絵)」(4ウ)

「同」うき事にむねのみさはくひ、きには

4 肥前国「へ」あひみんと思ふ心は松浦なる鏡の神や空にしるらん

5 年月可然やうにと念しつるに監にとられてはと云心也

6 憂所也非名所うきたる心もあり

7 ひ、きの灘 播磨守

ひ、きのなたもさはらさりけり⁸

九条に昔しれる人尋出てゐけりすみつくへき

たよりもなく彼国にても願をたてつれば八幡(やまはた)に

まうて又うちにて初瀬へ参らせらる四日といふ

にからうして9つはいちといふ所につきたり此宿に

又おとこ女おほく馬四五ひかせてつきたり10上

へたて、おはすさるはよと、もにこひなく右近也

ふんこの介まいり物手つからとりてこれはおまへに

参らせ給へなといふを右近のぞけは此おとこの顔

見し心ちす三条(安名世)めすとよぶ女をみれば又見し「(5才)

人也此三条をよびて我をは見しりたりやとて

右近かほをさし出たれば三条女手を打てあなうれし

夕かほの上のおはすやとおとろくしくなく右近は

姫君はととふめのとに聞えてみな夢のこ、ちす

うへ(夕かほ)のうせ給ふ事も今かたる二三(源也)人なからむせか

へりぬ日暮て御あかしした、めはて、右近は姫

君をうつくしと見る11三条は此姫君を当国の

ずれうの北のかたともなしてたべとおがむ三日こ

もりて昔をかたり此る12り君の御ためとて御あかし

8 さはらぬはをとりたる心也

9 椿市(へ)海石柏市(うづ)のやそのちまたにたちぬらしむすひしひもをとかまくもおし

10 軟障幕ノ類也 松などの絵あり

11 三条か心久しく田舎に住て心せはく成て当国のす領をいかめしき事に思ひて祈る

也 当国は大和也

文大とこにか、す京にて父おと、に申給へなといふ「(5ウ)

¹²〔挿絵〕「(6才)

〔右近〕¹³「ふたもとのすきのたちとをたつねすは

ふる川のへに君を見ましや

〔玉かつら〕¹⁴はつせ川はやくの事はしらねとも

けふのあふせに身さへななかれぬ¹⁵

京にかへりて源と紫の上おはします所にて右近

玉かつらの事かたる父おと、にはなしらせそ我は

子もすくなければおほえぬ所より尋出たりとも

いはんとの給ふ源より玉かつらへ

¹⁶しらすともたつねてしらんみしま江に

おふるみくりのすちはたえしを

〔玉かつら〕¹⁷数ならぬみくりやなにのすちなれば「(6ウ)

12 長谷寺観音十一面二丈六尺文武天皇御宇徳導上人造立之立之神亀元年公家被建

立立当宇同四年三月廿日供養講師行基菩薩

大唐僖宗皇帝之后馬頭夫人御形ノ見にくき事を歎き給ふ仙人ノをしへによりて東に

向テ日本長谷ノ観音に祈請しけるに夢中に一人ノ貴僧紫雲に乗テ東方より来て手を

のへて瓶水ヲ面に灑ト見えて忽に容貌端正に成にケリ因茲茲侍女ヲ引率シテ明州ノ

津に出給て十種ノ宝物ヲ奉らる、ト云々

又吉備大臣入唐ノ時長谷寺観音住吉明神に祈請して野馬台ヲよみける靈瑞ある也

(翻刻者注当当場面に関する注釈で、挿絵の上下欄に記される)

13 「へ」初瀬川ふる川のへに二もとある杉年をへて又もあひみん二もとある杉

14 はやくは昔也

15 なかれぬは涙也

16 そなたはしらすとも源のゆかりにてあると也

17 みくりは筋たえぬ物にや判説不明

うきにしもかくねをと、めけん

右近かさとの五条に先忍ひてわたし奉り人々¹⁸

えりと、のへさうぞくなどとして十月にそわたり

給けるうしとらの町の西のたい文殿¹⁹をことかた

へうつして花ちるとあひすみ也山^{源言}がつめきておひ

出たる人也ひなびたる事は花ちるにをしへ給へとこ

まやかに聞え給ふ此母夕顔の事紫へも花ちるへ

もかたり此姫君をは子のやうにかたりなし給へり

玉に源たいめんし給ておやのかほはゆかしきものと

こそきけさもおほさぬかとして几帳をやり給へは

はつかしけにてそばみおはする右近火をか、け「(アオ

てすこしよすおもなの人やとわらひ給ふ年ころ^{源訓}

心にかけてぬひまなくなけき侍を見奉るも夢

の心ちしてとおやめきて聞え給ふよく夕顔に

おほえ給へれば源

こひわたる身はそれならて玉かつら²⁰

いかなるすちをたつねきつらん²¹

年の暮には人々のさうそくなとおほしをきて紅

18 召つかへ人の衣裳など源よりつかはされぬなひたるをあらためらる、也

19 ふとの文殿 文書ヲ納玉フ所也

20 身はそれならては夕顔にはあらて也

(翻刻者注 脚注にも頭注(注20)と同じく「身はそれならて夕顔にはあらて也」とある)

21 いかなる筋実父ヲこそ也

梅のいともんうきたるゑびぞめ²²の御こうちき²³今や

う色のすぐれたるとは紫の上桜²⁴のほそなが²⁵につや

やかなるかいねり²⁷そへて姫君の御れうあさはなだ²⁸

のかいふ²⁹のをり物こきかいねりぐして夏の御かた「(アウ)

山ぶきのほそなか玉かつら³⁰柳³¹のをり物のよしあるから

草をれるを末つむ梅³²のおり枝てふ鳥ちがひから

めいたる白きこうちきにこきつや、かなるかさねて

あかしの御かたうつせみのあま君³³にあをにび³⁴のをり

ものくちなしの御ぞゆるし色³⁴そへ給ふ末つむは二条

のひかしのゐんにおはず也 末つむ

きてみれはうらみられけりからころも³⁵

かへしやりてん袖をぬらして

22 ゑびぞめ 表すはう裏はなた

23 小掛

24 桜(おもて白うら紫 又おもてすわう共)

25 ほそなか おさなき上臈のうへにきる物也

26 つや、か 厳又光

27 かいねり 薄紅の綾はりたる也

28 あさはなた そら色也

29 かいふ 海賦 大波に海松貝などの紋ヲをりたる也

30 山吹(おもて朽葉うら紅梅)

31 柳(うす青)

32 こきつや、か 濃紫

33 青鈍 あさき

34 ゆるし色 薄紅

35 源のうとくしきをうらみての歌也

御使にやまふきのうちき袖ぐちす、けたるを
かづけ給へり」(8才)

初音〔源卅六才元旦也 以歌〕

六条院の内見所おほき御かた／＼の中に春の御
まへとりわきて梅のかもみすの内匂ひにまがひ
てやすらかにすみなし給へりさふらふ人々もわかや
かにすぐれたるを明石の姫君の御かたにえらせ給て
おとなびたるは中／＼よし／＼しくさうそきてこ、か
しこにむれぬつ、³⁶はがためはいはひしてもち³⁷
か、みをととりよせて千とせのかけにしるきいはひ
事してそほれあへるにおと、さしのそき給へれば
ふところで引なをしたり人々にたはふれ事い
ひて中将の君そかねて見ゆるなと夕つかたたいの」(8ウ)

うへにはひ事きこえ給て源
うすこほりとけぬる池³⁸のか、みには
世にたくひなきかけそならへる

- 36 齒固身の吉日を見てノ祝也
37 たかつき 六本に折敷ヲすゆ 一ノ台ニ餅大根橋ヲ盛ル
〈へ〉我をのみ世にももちるのか、み草咲さかへたるかけそうかへる
近江国 火きりの郷より用ゆ
38 白氏文集 柳似³⁹舞腰⁴⁰池⁴¹如⁴²鏡
かけそならへる 源卜紫

くもりなき池のか、みによるつ代を
すむへきかけそしるくみえける

けふは子の日也姫君のかたにわたり給へはわらはしも⁴⁰
づかへなと御前の山の⁴¹〈へ〉小松ひきあそふ明石のうへ
よりひげこともわりごなと奉れ給へり五えうの
えだにうつる⁴²鶯もおもふ心あらんかし
とし月を松にひかれてふる人に

〈へ〉けふうくひすのはつねきかせよ」(9才)
(挿絵)」(9ウ)

〔姫君〕ひきわかれとしはふれともうくひすの⁴³
すたちし松のねをわすれめや⁴⁴
⁴⁵すたちし松のねをわすれめや⁴⁶

夏⁴⁷の御かたにはいとむつましく有かたからんいもせの

- 40 十節記云 正月子日登⁴⁸岳⁴⁹遥望⁵⁰四方⁵¹得⁵²陰陽⁵³静⁵⁴氣除⁵⁵憂惱⁵⁶之術⁵⁷
松は風霜にもをかさぬ徳あり
又引⁵⁸小松⁵⁹延⁶⁰週年⁶¹
詩倚⁶²松根⁶³摩⁶⁴腰⁶⁵千年翠滿⁶⁶手
41 〈へ〉千とせまでかされる松もけふよりは君にひかれて万代やへん
42 〈へ〉松の上になく鶯の声をこそ初音の日とはいふへかりけれ
43 〈へ〉めつらしき千よのはしめの子日にはまつけふをこそひくへかりけれ
此歌姫君のよみ始也
44 紫へ姫君をわたして四五年也
45 すたちしはそなた也
46 音卜根
〈へ〉春のたつけ鶯の初声をなきてたれにかまつきかすらん
〈へ〉けふたにも初音きかせよ鶯のをとせぬ里はすむかひもなし
〈此二首八明石ノ歌ノ引歌也〉

契りはかり聞えかはし給て西のたいへわたり給ふ

またすみなれ給はねとけはひおかしく物きよ

げにすみなし給へり〔玉かつら也〕明石の御かたにわたり給へ

は硯さうしともとりちらしきんうちをき火

おけにじゅうくゆらかし小松の御返めつらしとみ給て

めつらしや花のねくら⁴⁷に来つたひて

たにのふるす⁴⁸をとへるうくひす

こなたにとまり給ぬ明ほの、程に出給て紫へは 一（10才）

あやしきうた、ねして今こそ聞え給ふに御いらへ⁴⁹

もなし日たかくおきたりけふはりんじきやく上達⁵⁰

部みこたち参給て御あそひありて物のしらへ共

おもしろし此とのうたひて時くおと、も声打そへ^源

給へり東のゐんにはなれ給へる人々はつれくのみま

さる日ごろへてわたり給へり末つむのおまへの紅梅

見はやす人もなきを見わたし給て

ふること⁴⁷の春のこすゑにたつねきて

よのつねならぬ花⁵¹をみるかな

うつせみの尼は仏に所えさせ奉りてかごやかにつ

47 ねくらは紫の上

48 ふるすは明石ノ上

49 少しねたみ心

50 臨時客 撰政関白の亭に春の始上達部を招テ遊ふをいふ也 きたまらぬ客を云歟 中
宮 東宮 左大臣ハ大饗ト云也 二日三日ノ事也

51 花ハ鼻也

ほねずみにしなしおこなひつとめたるさま哀也 一（10ウ）

ことしはおとこたうかあり内より朱雀院に参て⁵²

次に此^{六条院}るんにまいる夜あけかた大后の宮の^{五十巻}

御かたなとめつる也殿の中将内の大^{真中將}殿の君竹川^{五十}

うたひてかよれるすかたなつかしきこゑくも也⁵⁴

れいのわたかづきわたりてまかてぬ〔正月十六日也〕 一（11才）⁵⁵

（挿絵） 一（11ウ）

胡蝶 〔源卅六才 歌并詞〕

やよひ廿日あまり春のおまへ^{紫の上}花の色鳥の声山

のこだち中島のわたりめつらしう見ゆからめいたる船

つくらせおろしはしめ給ふうたづかさの⁵⁷人めしてふねの

がくせらる上達部あまた参給ふ秋好中宮里にお

52 十四日男踏歌 十六日女踏歌 隔年にある事也 舞妓ヲ進ル故ノ名也

男踏歌 昔ハ殿上地下四位 十四日五日ノ夜京中ノ遊士共月ニ興シテウタヒ舞シ也今
ノ世ニ千秋万歳ト云テアリク是也

天武天皇三年朔朝〔節会〕

同十年正月七日白馬節供也

同天平元年正月十四日男踏歌

53 竹川 催馬楽

54 曲〔カヨレル〕

55 冠ノ高巾子ニ綿ヲカクル也

56 〔翻刻者註〕「六」を見消ちして「四」と墨書

57 雅楽寮 楽ヲツカサトル也

はしますいかて此花のおり御覽せさせんとおほせど

かるらかにわたり給ふへきならねはわかき女房達を

のせ給て南の池のこなたにとをしかよはし給ふ58龍頭59鷄

首をからのよそひにしつらひてみづらゆひたるわらはへ

かちとりさほさすらうをめぐる藤の色も池の水にか

げをうつし山ふき岸よりこぼれていみしきさかり也」(12才)

水鳥のほそきえだをくはへてとびちかふ〔紫の上の女房達〕

風ふけは波の花さへいろ見えて

こや名にたてるやまふきのさき61

〔同〕春の池やゐての川瀬にかよふらん

さしのやまふきそこもにほへり

かめのうへの山もたつねし舟のうちに62

おひせぬ名をもこゝにのこさん

春の日のうらゝにさしてゆくふねは

さほのしつくも花そちりける

わうしやうといふがくおもしろくつりどのにさしよせ63

られておりぬ舞人など手のかぎりつくさせ給ふ」(12ウ)

58 竜ハ水ヲ得タリ

59 鷄ハ風ニ向テウシロヘ飛也

60 からこの出立也

61 近江国也

62 王質古事 不レ見ニ蓬萊ノ不レ敢テ帰ニ童男草女舟ノ中ニ老タリ 仙宮ニタトヘテ
也 蓬萊山ハ亀ノ背ニ負ト也

63 皇聲〔平調〕

〔挿絵〕」(13才)

夜に入ぬれはかゝり火ともして御はしものとの苔の

上に楽人めして上達部みこたちも皆ひきもの

ふき物とりくニし給ふこと共のしらへ花やかに

かきあはせあなたうとあそひ給へりかへりこゑに

喜春楽たちそひて兵部卿宮青柳おりかへし

うたひ給ふ中宮物へたてゝねたうきこしめす64

へ玉かつらの事を聞えいてゝ心をなびかし給ふ人おほかり

〔兵部卿宮〕むらさきのゆへにこゝろをしめたれば65

ふちに身をなけん名やおしけき

〔源〕ふちに身をなけつへしやとこの春は

花のあたりをたちさらて見よ」(13ウ)

けふは中宮の御どきやうの始也春のおまへより中宮へ

御心さしに仏に花奉り給ふ鳥蝶67にさうそき

わけたるわらはへ八人鳥にはしろかねの花がめに

桜をさし蝶にはこかねのかめに山ぶきをさして

南のおまへの山ノきはよりこぎ出ておまへに出る

いとあはれにみゆ御せうそこは殿の中將68して

64 紫ノ上のおまへなれば中宮は秋を好み給ふにより物隔テねたくおほさるゝ也

65 玉ヲ源ノ実子ト思給ふ然れば兵部卿のめいなればゆかりの色をかこつと也

66 禁中二季ノ御読経トテ四季ニ大般若経あり 天平十七年九月二平城 中宮僧六百人
ヲ請して講せらるゝ是始也

67 蝶ノ舞ハ宇多ノ御時作られたる也

〔紫上〕花その、こてふをさへや下くさに

秋まつむしはうとくみるらん

宮は彼紅葉の御返なりとほ、ゑみて御らんす鳥

には桜のほそなか蝶にはやまふきかさねて給る

中將の君には藤のほそなか女のさうぞくかづけ給ふ

〔中宮返〕こてふにもさそはれなまし心ありて

〔へ〕やへやまふきをへたてさりせは

西のたいへ人々の御文しけく成ゆくをおと、はおか

しうおほして御返しそ、のかし聞え給ふ兵部卿

宮内の大殿の中將ひげぐるの右大將より也大殿

の中將はいもうと、もしり給はて

おもふとも君はしらしなわきかへり

岩もる水にいろし見えねは

おと、右近をめし出て此返しともをは人えりし

てせさせよとの給ふ兵部卿の宮は人がらいたう

あだめいてかよふ所あまたと聞ゆれはとおほす

大將はねび過たれば人々わつらはしがる也とさまく

68 心から春まつそのは我やとの紅葉を風のつてにても見よ 秋好ノ歌也前にあり此ゆ

へに今つかはさる、也

69 藤 おもて薄紫 うら濃紫 上臈女房のきる物也

70 〔へ〕名にしおへは八重やまふきそうかりけるへたて、おれる君によそへて心へ

たてすはさそはれゆかん也

71 此歌ゆへ岩もる中將と云也 水には色なき物なれば也

72 兄弟さへ知給はぬ玉かつらなれば人ゑりしてとの給ふにや

に人しれす思ひさためかね給ふおと、もけしき有

ことばを時くませ給へど玉は見しらぬさまな

れはすゞろに打なげかれ給ふ

〔源〕ませの内にねふかくうへし竹の子の

をのかよ、にやおひわかるへき

〔玉〕今さらになかならんよかわか竹の

おひはしめけんねをはたつねん

御くた物のなかにたちはなのあるをまさくりて源

〔へ〕たちはなのかほりし袖によそふれば

かはれる身ともおもほえぬかな

〔玉〕袖のかをよそふるからにたちはなの

みさへはかなくなりもこそすれ

むつかしとおもひてうつふし給へるさまなつかしうはだ

つきのこまかにうつくしけなるに物思ひそふ心ち

してけふは思ふ事聞えしらせ給ける女は心うく

わな、かる、けしきもしるけれどいとようもて

かくして人とがめらるへくもあらぬ心の程そさり

げなくともてかくし給へと聞え給ふさかしらなる

73 辛〔ス、ロ〕

74 ませの内に 六条院也

75 まことの親をば也

76 〔へ〕さ月まつ花橘の香をかけは昔の人の袖の香そする 昔の袖は夕顔の上也

77 夕顔によそふるからは我もきえんと也

78 さりけなくさありけ也

御おや心なりかし人々はこまやかなる御物かたりに
 かしこまりてちかくもさふらはす御ぞとものけは^(宝それて也)
 ひいとよまぎらはしすへし給てちかやかにふし「(15ウ)
 給ふ人もあやしと思ふへければいたう夜もふかさて
 出給ぬ又の日御文

⁷⁹ (へ)うちとけてねも見ぬものをわか草の

事ありかほにむすほゝるらん

御返事聞えさらんも人めあやしければたゝうけ給ぬ
 みたり心ちのあしう侍れは聞えさせぬとのみあり

蛩
 (源卅六才五月 以詞歌)

玉かつらはおとゝの思ひのほかなる御けしきにおほし
 みたるおとゝも打出そめ給ては中くくるしくおほす「(16才)
 しけくわたり給つゝ人とをきおりはけしきばみき
 こえ給ふあいぎやうづきたるけはひのみそひ給へは兵⁸⁰
 部卿宮などはまめやかにせめ聞え給ふらうの程⁸¹
 いくばくならぬに御母かたのをぢなりける宰相のむす⁸²
 め世におとろへたるを尋とりおとなびたる人なれば

- 79 (へ)うらわかみねよけにみゆるわか草を人のむすはん事をしそ思ふ
 80 愛敬
 81 らうの程 労也 夏をかさねらうつもる也
 82 玉のいとこ也

さるへきおりく御かへりをしへてかゝせ給ふよろしき^(玉)
 御かへりのあるを兵はかくともしり給はてしのびや
 かにおはしたり源と兵は御几帳はかりへたてゝ
 ちかき程也宰相の君出て御せうそこつたへたり^(兵部卿)

玉は東おもてに引いりて御とのごもりけるを此^(源)

宮^(兵)などにはすこしけぢかくても聞え給へといさめ「(16ウ)
⁸³ 給てもやのきはなる御木丁のもとにすべり出給へり

御几丁のかたひらに蛩をおほくつゝみてにはかに
 しそくをさし出たるかとあさましきに玉は扇を
 さしかくし給へるかたはらめいとおかしけ也兵も

のそき給ひなんまこと^(源)の御むすめをはかくしも

もてさばき給はじうたてある御心也けり源はこと
 かたよりやをらすへり出給ぬ兵は御心ときめき^(兵)

せられ給て玉のそびやかにふし給へりつるやうだい⁸⁴

おかしかりつるをあかすおほして宮

なくこゑもきこえぬむしの思ひたに⁸⁵

人のけつにはきゆるものかは「(17才)

〔玉〕声はせて身をのみこかすほたるこそ⁸⁶

いふよりまさるおもひなるらめ

- 83 母屋 本屋也 おもやと云也
 84 そひやか ちいさき姿也
 85 いはんや音をそゆる思ひはふかきと也
 86 声のなき虫の思ひこそふかけれ人は言にもあらはせり兵ノハ浅キト也

はかなく聞えなして玉はひきいり給にければ
兵はうれはしさをうらみて夜ふかく出給ぬ源は

かゝる御心ぐせなれば中宮(永延)なども聞えうごかし給へど
やんことなきかたのをよびなさにわつらはしくて

過給ぬるを此君(玉かつ)をは忍ひかたきおりく人のうた

がひ思ふへき御もてなし也(五月)には馬ばのおと、

に出給ひけるついでにわたり給へり源のさまわか

きよらにつや(光)もいろもこぼるはかり也兵部卿宮より

けふさへやひく人もなきみかくれに(17ウ)

おふるあやめのねのみなかれん

〔玉〕88あらはれていと、あさくもみゆるかな

あやめもわかすなけれけるねの

所くより源へくすだま89まいるむまばのおと、は

こなたのらうより見とをす程遠からす夕霧の

中将左のつかさ也たいの御かたのわらはへ物見にら

うの戸口に今めきたるすそ90この几丁たてわたし

しもつかへなとさまよふ西のたいよりさうぶがさね91の

87 けふは誰もひく物なれともけふさへひく人もなきと也

88 音にあらはれたるは浅きと也

89 薬玉 壺糸共 昔武徳殿ニテおこなはる群臣に酒ヲ給ふ人々 菖蒲葛ヲカク薬玉ヲヒ
チニカクレハ悪鬼を払除クト也 如日蔭髪五色ノ糸ヲ付る也

90 下濃 スソコノ木帳うへハ白帷ノスソコノカ紫カ

91 菖蒲重 おもて青うら紅梅

あこめふたあひのかさみきたるわらはへ四人92
しもつかへはあふちのすそこのもなでしこのからき93

ぬなときたり花ちる里のはこきひとへかさねな94 (18才)

てしこかさねのかさみをのくいどみかほ也わかやかなる

殿上人はめをたてつ、けしきばむみこたちお

はしつどひてつかひともさまことにあそひくらし

給ふ打毬97楽らくそんなとあそひてかちまけ

の、しるとねり98ともものろくしなく給る夜更て

人くあがれ給ぬ (18ウ)

(挿絵) (19才)

おと、は花ちる里におほとのもりぬ今は大かたの御

むつびにておましなともこと事なれば花ちる里

くそのこまもすさめぬ草と名にたてる99

みきはのあやめけふやひきつる100

92 二藍 赤花青花 上赤ク下青シキ、ヤウ色ト云物歟

93 袴 表薄色 裏青

94 ナテシコ 表紅 裏紫

95 汗衫 袖なし 打かけてきる物也

96 競馬 左ハ蘇芳ツクモ 舞ノ名 右ハ狛形 蘇ハ獅子ノ如シ子二人アリ 面形如犬 狛ハ
馬形 二疋乗尻ハ舞人也 以此舞ヲ御輿ヲむかへ奉る也

五月三日左近騎射荒手結 五日真手結 四日右近ノ荒手 六日真手結

97 六日武徳殿ノ騎射果テ打毬ノ事アリ唐人ノ装束ニテ馬ニ乗テ毬子ヲはしらむる其
時ノ楽也

98 近衛舎人

99 神楽 其駒くその駒そやわれにくさかふ草はとりかはん水はとりかはん

100 菖蒲は駒のすさめぬ草也 けふの御出はと也

〔源〕にほとりにかけをならふるわかこまは¹⁰¹

いつかあやめにひきわかるへき

長雨いたくしてつれ／＼なるにふる事とものついて
に源より玉のかたへ

おもひあまりむかしのあとをたつぬれと

おやにそむける子そたくひなき

〔玉〕ふるきあとをたつぬれとけになかりけり 〔19ウ〕

この世にかゝるおやのこゝろは

夕霧の中将を紫の御かたにはけどをくもてなし

みすのうちにはゆるし給はす西のたいの姫君を右

中將はふかく思ひしみて夕霧をかこちよりけ¹⁰²

れどつれなくいらへ給へりへ内のおと、は御子たち腹^{玉かつらの事也}

ばらにおほかるになてしこをゆくゑしらすあや

しきさまにてはふれやすらんとおほしわたる¹⁰³

玉かつらを源の御むすめとおほして君たちにも

もしさやうの名のりする人あらはみ、と、めよ

などの給ふ 〔20才〕

101 わかこまはこも也 こもとあやめの如く源ト花ちるわかるましきと也 影をならへん也 鳩鳥は枕詞也

102 かこちはうらみ也

103 放埒裏也

瞿麦 〔同六月以詞ト歌 源卅六才〕

いとあつき日東のつり殿に出てす、み給ふ夕霧¹⁰⁴

殿上人あまたさふらひて西川より鮎かも川の¹⁰⁵

いしぶし奉るおまへにててうし参らす大殿の君¹⁰⁶

たちも参給ておほみき参りひみづすいはん¹⁰⁷¹⁰⁸¹⁰⁹

とり／＼にくふ御物語のつゐてに内のおと、のほか

ばらのむすめ尋出てかしつき給ふはまことかと

とひ給へは弁少將此春の頃夢かたりし給けれ¹¹⁰

どくはしきさまはえしり侍らすときこゆ〔近江の君の事也〕 〔20ウ〕

〔挿絵〕 〔21才〕

源は西のたいへわたり給てわこん引よせて月も

なき頃なれはか、り火こなたにとめすいにしへ父

おと、のなてしことかたり出給しもた、今のやうにて

なてしこのとこなつかしきいろを見は¹¹¹

もとのかきねを人やたつねん

104 六条院ノ東ノ釣殿也涼所也

105 西川 桂川也禁河ト云 交野ヲ禁野ト云也 御狩ノ為ニ禁スル所也

106 イシフシ 小魚也 石臥 鱈鯨 いしもちと云歟

107 調

108 氷水

109 水飯 干飯ノ類也

110 蛩のまきに内府の夢の事あり夏なれ共春の頃トかけり 柏木此あふみの君ヲ尋出し参らせ給し也

111 玉をなてしこトは、き、の巻に頭ノ中將ノ歌に有

〔玉〕山かつのかきほにおいしなてしこの

もとの根さしをたれかたつねん

内のおと、弁（眞王子）の少将も御供にて雲井の雁の御

かたへわたり給へり姫君はひるねし給へる程也らう

たげにさ、やか也（112）すき給へるはだつきうつくしけ

に扇をもちなからかいなを枕にて御ぐしおかし」〔21ウ〕

け也父おと、扇をならし給へはふともおとろ

き給はず見あげ給へるまみらうたけ也へおと、

此北のたいの今姫君をいかにせんかへしをくらんも

かるくしく物ぐるをしきやう也女御（私半殿）の君に参ら

せん女房なとしてつ、ますいひをしへさせ給へと

聞え給ふ此あふみの君は五せちの君とすぐろく

をそうちけるせうさいく（113）とこふ声したどく

あなうたてと聞給ふ女御の里に物し給ふ時くわ

たり給て人の有さまも見ならひ給へとの給へは

いとうれしき事かなそれをこそねてもさめても

年頃思ひつれおほみおほつほとり（115）にもつかう」〔22オ〕

まつりなん水をくみいたゞきてもとさへづればに

つかはしからぬやく也とて打わらひ給ふさていつか

112 少々 細許

113 せうさい 勝賽又小目

114 したとく 舌利 舌早也

115 御大壺 小便筒也

女御殿には参り侍らんと聞ゆればよろしき日なと

やいふへからんよさりまうてんとて先文を参らす

〔近江〕草わかみひたちの海のいか、さき（116）

いかてあひみんたこのうらなみ

ちいさやかにまきむすんでなてしこの花に

つけたりひずまし（117）わらは女御（私半殿）の御かたの大はん所（大盤所）

によりてこれまいらせ給へといふしもつかへ見し

りて御文とりいる女御ほ、ゑみて打をかせ

給へる中納言（118）の君そばく見けり此返事中納言」〔22フ〕

の君にかき給へとゆづり給ふた、御文めきて

ひたちなるするかのうみのすまのうら

なみたちいてよはこさきの松

女御はあなうたてまことにみつからのにもこそい

ひなさんとおほす御（あふみ）かたこれを見ておかしの御

くちつきやまつとの給ふとてあまへたるたき

物たきしめ（121）べにといふ物かいつけてつくるひ

たるさまさるかたにあいぎやうつきたり

116 いか、してたこの浦に立出んといへる心はかり歎

117 ひすまし 下女也

118 女はう達也

119 四ヶ国ノ名所也

120 松は待との給ふと也

121 へい、いたいやへにも似たる物の花 天神七才の時の御詠也

篝火〔同秋 以詞并歌〕

はつ風涼しき五六日の夕月夜雲かくるゝに西」(23才)

のたいへ源わたり給てわごんならばし給ふ篝

火きえかたになるを御ともなる右近の太輔をめ

してともしつけさせ御琴を枕にてもろ共に

そひふし給へりやり水のほとりにひろごりふし

たるまゆみの木の下にうち松おどろくしから

ぬ程にをきたれは御前のかたは涼しけ也

〔源〕かゝり火に立そふ恋のけふりこそ

よにはたえせぬほのほなりけれ

〔玉〕ゆくゑなきそらにけちてよかゝり火の

たよりにたくふけふりとならは」(23ウ)

(挿絵) 一(24才)

東のたいのかたに笛の音さうに吹あはせたり

かゝり火と、められてす、しければこなたに

なんとせうそこあれは夕霧柏木弁少将まい

れり源中将夕霧ばんしきてうにおもしろく吹たり

弁少将ひやうし打いて、うたふ声す、むしに

まがひたりみすの内に物のねき、わく人も

し給ふらんかしの給ふ〔玉かつらの事也〕

野分〔同秋 以詞也〕

中宮の御前に秋の花をうへさせくろきあかぎの」(24ウ)

ませをゆひませ給へりれいの年よりも野分おとろ

くしく吹いつ南のおと葉の上にもせんざいつくろはせ

給ふおりしもかく吹出て露もとまるましくふき

ちらすおと、は姫君明石の御かたにおはします程に夕

きりの中将参給て東のわたとの、こざうじのかみ

よりつまどのあきたるを何心なく見いれ給へるに

ひさしのおましに給へる人物葉上にまぎるへくもあ

らすけたかくきよら也春の明ほの、かすみのま

よりかば桜の咲みたれたる心ちす見奉るわがが

ほにもうつりくるやうにあいぎやう葉上は匂ひたりみす

吹あくるを人々をさへていかにしたるにか打わらひ給へる」(25才)

(挿絵) 一(25ウ)

花葉の上ともを心くるしかりて見すて、入給はす御前

の女房あまた物きよげなれどめうつるへくもあ

122 うち松 篝たく時に打入くスルゆへに打松と云也

123 人のあやしふへきにとの心也

124 さう 笙しやう也

125 秋好

126 上より也

127 愛敬

らすおと、のけどをくもてなし給へるもことほりに

おほす也をそろしうてたちさるにそ西の御かた

よりおと、わたり給ふを中將（兼上三）又よりてみればもの

聞えておと、もほ、ゑみなどし給ふ中將はいま参り

たるやうにこはづくりてあゆみ出給へればされはよ彼

つま戸のあきたりけると見とがめおほす中將は三

条の大宮（兼上の母）の風にをぢ給はんとて出給ふ大宮まち

よろこひた、わな、き給ふ大きな木の枝もおれ

おと、のかはらさへ吹ちらす也暁かたに風少し（兼作也）」（26才）

しめりてむら雨のやうにふりいづ六条院にははな

れたる屋ともたふれたりなど人く申す東の（花ちる）

まちは人すくなにておとろき給はんにと人めして

所くつくろはすへきよしいひをきて南（兼）のお

と、に参り給へればまだみかうしも参らすうち（分務）

しはぶき給ふを聞つけて源おき給ふ中宮の

おまへにはわらはへおろさせて虫の籠ともに

露かはせ四五人はかり草むらにさまよふ」（26ウ）

（挿絵）「（27才）

源むらさきの上にきのふ風のまぎれに中將（分務）は見

給ふや彼戸のあきたりしはとのたまへはおもてあ

かみていかてかさはあらんわた殿のかたには人の

をともせざりし物をとの給ふ猶ひとりごちて中

宮へわたり給ふ明石の上はさうのことをまざぐり（秋好）

はしちかくる給へるに御さきの声しけり風の

さはぎばかりをとふらひてつれなく立かへり給へは

「明石上」大かたにおきのはすくる風のをとも

うき身ひとつにしむ心ちして

西のたいにはをそろしと思ひあかしけるなこりにねす（玉かつら）

ぐしていまそか、みなど見給ふ」（27ウ）

（挿絵）「（28才）

源入給て風につけてもれいのすぢにむつかしう聞

え給へはうたてと思ひなからとも打ゑみ給ふつら

つきほう（兼）づきなどいふめるやうにふくらかにてうつ

くしうおほゆ中將いかにて此御かたち見てしかなと木

丁ひきあげ給へはよく見ゆおや子と聞えなから（源下玉）

かくふところはなれす物ちかゝるへき程かはとめと

まりぬすこしそばみたるを引よせ給へるに御ぐ

しのなみよりてはらくとこぼれかゝりたる程女（兼）

もいとむつかしきけしきなからさすがなごやかなる（兼）

さましてよりかゝり給へるはなれくしきにこそあ

めれいかなる事にかとおほすきのふみし御（兼上）けはひ」（28ウ）

にはをととりたれどみるにゑまる、さまは立ならひ

128 みかうし参るも参らすも起臥共に用る詞也

129 洛神珠 保々都岐
130 柔和

ぬへく見ゆ八重山ふきの咲みたれたるさかりに露
かゝれる夕ばへぞふとおもはるゝ玉かつら

ふきみたる風のけしきをみなへし

しほれしぬへき心ちこそすれ

〔源〕下露になひかましかはをみなへし¹³¹

あらし風にはしほれさらまし

東の御かたへわたり給ふねびこ¹³²だちおまへにあまた

してほそびつめく物にわたひきかけてまさぐり¹³⁴

きよなるきぬともひきちらし給ふ¹³³姫君の御

かたに夕霧参給へは風をぢさせ給て紫の御」(29才)

かたにおはしますとめのと申す紙すゝりこひて

雲井の雁への御文かゝせ給ふ夕霧

風さはきむら雲まよふゆふへにも

わするゝまなくわすられぬ君

大宮の御もとに参給へればよろしきわか人ともこゝ

にもさふらへど彼さくら¹³⁵やまふき¹³⁶になるへくも

あらす内のおとゝも参り給ひ御物かたりのつ

いてに^{近江}今姫君の事きこえ給ふ」(29ウ)

131 なひき給はゝあらし風はふかしと也

132 調後達

133 絹櫃ぬりおけ也

134 まさくりなふる心也

135 桜は紫上

136 款冬は玉葛

行幸〔源卅六七才以歌〕

玉かつらのゆくすゑ¹³⁷蚩兵部卿髯黒大将なとへ

とうちくにおほしいたらぬ事なししはすに大原

野の行幸とて世に残る人なく見さはぐを六条

院よりも御かたく引出見給ふ^{スサセ}朱雀より五条

のおほちを西さまにおれ給ふ桂川のもとまで

物見車ひまなしみこ達かんだちめの御馬くら隨

身馬そへのさうぞくをかざり左右の大臣内大臣

納言よりしも残らす供奉也雪いさゝかちりて

道の空えん也みこたち上達部は鷹にかゝつらひ

給ふ玉かつらはみかとのあか色の御ぞ奉りてうるは^鹿」(30才)

しき御かたちをなすらへなく見給ふ^{ひやくろ}右大将や¹³⁹

なぐみをひてつかうまつれり色くろくひげがちに

て心つきなし源は御供にはなし御みきくだ物なと

奉らせ給へり^{源より}蔵人の左衛門のぞう御使にて¹⁴⁰きし

一えた奉らせ給ふ^{源へ}

〔御〕雪ふかきをしほの山にたつきしの

137 内々

138 赤色袍

139 胡籙

140 鳥を枝に付る事伊勢物語に忠仁公奉る雉九月也梅の作枝に付たり

ふるきあとをもけふはたつねよ¹⁴¹

〔源御返〕 へへをしほ山みゆきつもれる松はらに¹⁴²

けふはかりなるあとやなからん¹⁴³ 〔30ウ〕

〔挿絵〕 〔31才〕

又の日源より玉かつらへきのふうへは見奉らせ給ふや

みやつかへの事はいかにとの御文也御返しには

へへ¹⁴⁴うちきらし朝くもりせしみゆきには

さやかにそらのひかりやは見し

〔源〕 へへ¹⁴⁵あかねさすひかりはそらくもらぬを

なとてみゆきにめをきらしけん

玉の御もぎの事二月にとおほす此御こしゆひに

父おと、をとあれは大宮こそ冬よりなやみ給

夕霧もよるひる三条にさふらひ給ふ大宮世に

をはするうちに玉の事あらはしてんとおほして

源わたらせ給ふ大宮おきみ給ひけうそくに 〔31ウ〕

か、り夕霧と雲井の事を内大臣の心えすの給ふ

との事なとかたり給ふ源も玉かつらの事きこえ出

141 延喜ノ帝野の行幸あり

142 へへ 大原や小塩の山の小松はらはや木たか、れ千代のかけみん

143 源ノ御返代々行幸はありしかとけふのみゆき程なる日出キはあらしと也

144 打霧シ さやかに見えさるとの心也

へへ 打きらし雪はふりつ、しかすかに我家の園に鶯のなく

145 へへ あまの原あかねさし出る光にはいつれのぬまかきえ残るへき

朝日の出んとて先あかきを云り目に霧のさへきりたるやう也

146 男は元服女は裳きる也

給へは近江の君の事も大宮聞え給へり大宮より

内のおと、へ御文あれは夕霧と姫君の事ならん

とおほしなから参給へり藤大納言殿上人督¹⁴⁷

人頭五位藏人近衛の中少将弁官など十よ人

た、人もおほく参りてかはらけたひへなながれ

昔いまの御物語して玉の事ほのめかし給へは

あはれにめつらかにも侍るかなとまつ打なき給ふ¹⁴⁸

六条殿もゑひなきにや打しほたれ給へり大宮

の御心ちよろしう見え給へはをのくまかて給ふ 〔32才〕

御ともの人へは何事ともしらす夕霧もかゝる事の

心しらせ給ふ御もぎは二月十六日也三条のみや

より御使あり御くしのはこ御文には

ふたかたにいひもてゆけは玉くしけ¹⁴⁹

わか身はなれぬかけと也けり

秋好中宮よりしろき御もからきぬ御くしあげの

さうそくつぽにからのたき物入て奉給ふすゑ

つむよりあをにびのほそなか一かさねおちぐりの¹⁵⁰

はかまむらさきのしらきり見ゆるあられちの¹⁵¹

147 玉は三条の宮の御孫源氏ノ子ニシテモはなれぬ心に二かた也

148 青にひ 服者ならても用る也只にひ色は服衣也

149 ほそなか おさなき上臈ノ上にきる物也

150 おちくり 濃紅のくるみ入たる也

151 しらきりはしらみきはみたる也

152 あられ地はし、ら也

こうちき衣ばこに入て御文には

わか身こそうらみられければから衣」(32ウ)

君かたもとなれすとおもへは

源れいのおおしくおほし此御返し我せんとて

からころも又から衣からころも

かへすくもからころもなる

内のおと、とく参給へり御こしゆひの程え忍ひ

給はぬ御けしき也御かはらけ参りて 内大臣

うらめしやおきつ玉もをかつくまで

いそかくれけるあまのこ、ろよ

おと、玉にかはりて

よるへなみかゝるなきさに打よせて

あまもたつねぬもくすとそ見し」(33才)

あまたのけさう人は此内大臣のかく入おはして

程ふるはいかなるにかとうたかひ給へり近江の君聞

て女御のおまへに中将少将さふらひ給ふにあな

めでた殿は御むすめまうけ給へるかれもをとり

腹也内侍のかみにてみやつかへにいそき給ふと

きくと女御をうらみかくれば柏中将ほ、ゑみて

153 末摘ノ歌から衣おほきゆへ如此よみ給へり

154 え忍ひ給はぬはよろこひの涙也

155 玉藻ハ裳也

156 こなたからみてうらみ申さんとにや

157 懸想

内侍のかみあかばなにかしこそと思ふをひだう

にもおほしかけたるとの給ふに腹たちて中将の

君こそつらくはおはすれせうくの人へえたて

るましき殿のうちかなあなかしこくとしり

へざまにゐざりゐたり内侍のかみにはをのれを」(33ウ)

申なし給へと女御をせめ聞ゆ父おと、此のぞみを

き、打わらひて申文をつくり長歌などの心

はへを御覧せんにはすてさせ給はしとの給へは

やまと歌はあしくもつゞけ侍らんむねくしき

事は殿より申させ給へとて手ををしすりて

ゐたり御几帳のうしろにてきく女はうはしぬへ

くおぼゆ殿は物むつかしきおりはあふみのきみ

みるこそよろつまきるれとの給ふ」(34才)

(挿絵)」(34ウ)

蘭 [源卅七才 八九月 以詞并歌名也]

内侍のかみの御みやつかへの事を玉はいかならんとおほす

さりとしてかゝる有さまもあしき事はなけれどおと、

のむつかしき御心ばへをいかなるついでにかもては

なれ心ぎよくありはつへきとおほす父おと、は

158 非道 柏木近江を内侍にと思ふに父おと、の非道におほしかけたると也

159 里家なから尚侍に任せられ後に入内也

源のかくまで御覽せられ有かたき御はぐ、みに

かくろへ侍れは今さらにとりはなちけざやき給ふ

へき事にもあらねばたゞ御もてなしにしたがひな

むとおほしめさる大宮は三月廿日の頃うせ給ふ玉も

にび色にやつれ 宰相の中将もおなし色の少し

こまやかなるなをしすかたにて内侍の督の事の「(35才)

御使におはしたり玉の御けはひらうくしくなつ

かしきにつけてもかの野分のあしたの御あさかほ心

にかゝりて猶あらぬ心ちそひて人にさかすましと

侍つる事ありとけしきだてはちかき人々しりぞ

きて御几帳のうしろにそばみあへりそらせうそこ

をつぎくしうとりつ、けてこまやかに聞え給ふ

いらへ給はん事もなく忍ひやかに給へるいとうつく

し御ぶくも此月十三日にはぬがせ給ふへきをたがひ

に物うきかたみとおぼさる此あらはしぎぬの色なく

はえこそ思給へわくまじけれとの給ふつゝてに

らにの花をみすのつまよりさしいれ給へはとり給「(35ウ)

160 けさやき あらは也

161 玉ノ鈍色 祖母なれは三月なるへし

162 夕霧の中将 みゆきと蘭の間に宰相に任せらるゝと見えたり大宮も両巻のあひたに
うせ給へる也

163 宰相ハ輕服也 直衣 鈍色 平絹 或ハ薄鼠色ヲ用ユ卷纓ハ冠ノかさりを除ク心也

164 次く也(作り事をいひつ、け給ふ也)

165 あらはしきぬ 服衣也

らにらん也 蘭也

へる御袖をうごかして夕霧

おなし野の露にやつる、藤はかま

あはれはかけよかことはかりも

〔玉〕(へ) たつぬるに はるけき野への露ならば

うすむらさきやかことならまし

いますこしもらさまほしけれどあやしく

なやましとて入はて給ひぬれはいたくうち

なげきてたち給ぬ「(36才)

(挿絵)「(36ウ)

源に御返聞え給へは十月はかりにとおほす誰も

くくちおしくて心よせのよすがくにせめわび

給へど(へ)吉野の滝をせかんよりもかたき事な

れはいとわりなしといらふ頭中将父おと、より御使

に参りて

いもせ山ふかきみちをはたつねすて

(へ)をたえのはしにふみまとひける

166 藤衣ノ心計にや

167 かことは少也

168 (へ)武蔵のは袖ひつはかり分しかとわかむらさきはたつねわひにき

169 はるけき野へ 玉ト夕ト尋ぬれば兄弟ならすいとこ也うすきゆかりをかこち侍るへ
きにはるけき中にてなまき程にかこつ事は侍らしといひのかれたる心也

170 (へ)手をさへて吉野の滝はせきぬとも人の心はいか、とこそ思ふ

171 いもせは兄弟也

172 (へ)みちのくのをたえの橋やこれならんふみ、ふますみ心まとはす

〔玉〕¹⁷³まとひけるみちをはしらていもせ山
たとくしくそたれもふみ見し¹⁷⁴

大将は中将をつねによびとりおと、にも申させ給^{ひけろ}
玉はみやつかへを物うげにおほすにくはしきたよ 〔37才〕

りしあれは大将き、てた、大殿の御おもむけ^源

のことなるにこそはあれまことのおやの御心だに

たがはすはと弁のおもとをせめて 大将

かすならはいとひもせましなか月¹⁷⁵に

いのちをかくるおとそはかなき

蛭兵部卿の宮

朝日¹⁷⁶さすひかりをみても玉さ、の

はわけの霜¹⁷⁷をけたすもあらなん

むらさきの上の兄弟兵衛のかみ

わすれなんと思ふも物のかなしきを

いかさまにしていかさまにせん 〔37ウ〕

兵部卿宮の返し 玉かつら

心もてひかり¹⁷⁸にむかふあふひたに

173 何とも不知過しと也

174 文也

175 五月 九月 いむ月也 されといむ月か命とにや月た、は入内なれはいとふへきかと
也

176 朝日は天子

177 霜は我身

178 葵は日にむかひ葉をかたふけ根をかくす草也葵たに我は心のま、にならぬ身と也

あさをく霜ををのれやはけつ

真木柱 〔源州七八 以歌〕

髯黒大将弁のおもとに中だちさせて玉を恋し

事うへにきこしめさんもかしこし人^{全それ也}にもらさしと

いさめ給へどつ、みあへ給はす弁を石山の仏とも

大将はおほす源は御心ゆかねど父おと、のゆるしそ

め給へれは引返しゆるさぬけしきをみせんもいと 〔38才〕

おし大将は我殿にわたし奉らん事をいそき給へ

ど北の方よくも思ふまじと心のどかなるさまに

もてなし給ふ霜月には神わざしげく内侍所

にも事おほかる頃人さはがしきに大将殿かくろへ

たるさまにもてなしこもりおはするをかん^玉の君は

心つきなくおほす大将のおはせぬひるつかた源

玉かつらへわたり給へれはなやましげにしほれ給

へるをすこしおきあかり給へりおかしげにおもや

せ給ふ事のそひ給へるもよそに見はなつよとくち

おしうて 源〔玉は懐妊也〕

おりたちてくみは見ねともわたり川 〔38ウ〕¹⁷⁹

人のせとはたちきらさりしを

179 三途川ヲわたる時契りし人の手をとりて渡るといへり

〔玉〕みつせ川わたらぬさきにいかてなを¹⁸⁰

なみたのみかのあはときえなん

大将の北方はおほえ世にかるからすかたちも¹⁸¹

いとようおはしけるをあやしうしうねき御物の

けにとし頃わつらひ給てうつし心なきおりく¹⁸²

あれは御なかもあくかれ程へにけれど大将の御

心うつるかたもなきを此玉かつらの内侍めつらし

き御かたちにつり給へるを北のかたの父式部卿

の宮きこしめしていまめかしき人をわたしても

てかしづかかたすみ人わろくてそひものし¹⁸³」(39才)

給はんも人き、あしかるへしとて宮の東のたいをし

つらひてわたし奉らんと給ふを北方はおやの御¹⁸⁴

あたりといひなから今立かへらんと思ひみたれ

給ふにいと、なやましくてふし給へり此北方は紫

の上のあね君也大将北方と日々とひいりあてか

たらひ給ひ暮ぬれは心空にうきたちていか

で出¹⁸⁵なんとおほすに雪かきたれてふりかゝる空に

180 わたらぬさきには人のせとはいひかたかるへし猶はやくきえはてんの心なるへし

地獄の絵を見てよめる歌へ三瀬川わたるみさほもなかりけり何に衣をぬきてかく

らん

181 鬚大将の北の方は紫の上の姉也

182 うつし心 現也

183 あくかれ よりつかぬ心也

ふりいてんも人めいとおしういかにせんと思ひみだ

れはしちかうなめ給へり北方けしきをみて¹⁸⁴

あやにくなる雪に夜も更ぬめりやととむとも

と思ひめぐらし給へるけしきいと哀也大将さうそく¹⁸⁵」(39ウ)

してちいさき火とり袖に引いれてしめる給

へり北方いみしう思ひしづめてよりふし給へりと

見る程に俄におきあがりて大きなこのしたな

りつる火とりをとりて物のうしろによりてさと

いかけ給ふこまかなるはい大将殿のめはなにも

入ておぼれて物もおほえずはらひ給へどたち

みちたれは御ぞともぬぎ給ふ心たがひとはいひな

からつまはじきせられうとましよう成てあはれと

思ひつる心も残らす玉へは御文奉れ給ふ 大将

心さへそらにみたれし雪もよに¹⁸⁶

ひとりさへつるかたしきの袖¹⁸⁷」(40才)

(挿絵) 」（40ウ)

玉かつらは大将殿の夜がれを何ともおほさねば御返

はなし暮れはいそき出給ふに御ぞともやけとをり

にほひなとことやう也けふはえとりあへ給はて打

あはぬさま也もくの君御たき物しつ、聞ゆ〔女房衆也〕

184 あひなき也

185 臥籠也

186 夜に非ず

ひとりゐてこかるゝむねのくるしきに

おもひあまれるほのをとそ見し

〔大将〕うき事をおもひさはけはさまくくに

くゆるけふりそいとゝたちそふ

一夜のへだてたにめつらしうおほす北方はすほう

なとしさはげと御物のけこちたくおこり給へは

大将は殿にてもことかたにはなれる給て君達」(41才)

はかりをそ見給ふ女君一所十二三はかりおとこ君

二人なんおはしける父宮聞給てをのがあらん世の

かぎりはなかしたかひくづをれ給はんとて俄に

中将侍188徒民部太輔など御車三はかりして御むか

へに参れりけふをかぎりと思へはさふらふ人々も

ほろくゝとなきあへりおとこ君達は残しをき給

て姫君はをのれにそひ給へと也姫君は殿のいと

かなしうし給へは見奉らてはいかてかあらんえ

わたるまじとおほすつねによりる給ふ東おもて

の柱を人にゆづる心ちし給ふも哀にてひわだ

色の紙にたゝいさゝかかきてはしらのひわれたる」(41ウ)

はさまにかうがいのさきしてをしいれ給ふ

〔姫君〕今はとてやとかれぬともなれきつる

187 こちたくことくしき也

188 北ノ方の兄弟衆也

189 ひはた紫のきばみたる也

まきのはしらはわれをわするな

〔母君〕なれきとはおもひいつともなにゝより

たちとまるへきまきのはしらそ

〔中将のおもと〕あさけれといしまの水はすみはてゝ

やともる君やかかけはなるへき

〔もく〕ともかくもいはまの水のむすほゝれ

かけとむへくもおもほえぬ世を

御車引出てかへり見るも又はいかてかはおほす」(42才)

(挿絵)」(42ウ)

北のかたはかくひきゝりなる心もなきを父宮かる

くしうおはすると大将は思ひて玉へもかくとか

たりて出給ふ我殿にかへり給て姫君の歌をあ

はれにおほし式部卿へわたり給へりおとこ君十なるは

殿上し給ふ次の君は八はかりにて姫君に給へ

れは打なきて此君達を車にのせ我殿に帰り

給ふ年かへりておとこたうかあり玉は内侍のはいが

に参給へり承香殿の東おもてに御つほねしたり

此西に式部卿の御むすめの女御おはしけれはめ

だうはかりのへだてなるに御心の中ははるかにへ

190 もくはかりそめの人なれととゝまり北方はかけはなれ給ふと也

191 水をもくに比して不定ノ世也 かけは影の心也

192 正月十四日

193 女御は北方のいもうと也

194 めたう馬道廊下也

た、りけんかし秋好中宮弘徽殿の女御左大臣」(43才)

の女御¹⁹⁵さては中納言宰相のむすめ二人はかりそさ

ふらひ給ふ其夜蜚兵部卿宮より玉のかたへ

三山木¹⁹⁶にはねうちかはしるる鳥の

またなくねたき春にもあるかな

さすかにいとをしう聞えんかたなく思ひ給へるに

うへわたらせ給ていとなつかしけに思ひし事のた

がひたるをうらみの給はせて御

なとてかくはひあひかたきむらさきを

こゝろにふかくおもひそめけん

玉の御返し三位にかゝるし給ふ心にや

いかならん色ともしらぬむらさきを」(43ウ)

こゝろしてこそ人はそめけれ

大将玉かつらを我殿へむかへんとて御手車よせたれば

〔御〕九重²⁰⁰にかすみへたては梅の花

たゝかはかりもにほひこじとや

〔玉〕香²⁰²はかりは風にもつてよ花のえに

195 承香殿 髭黒の妹也 此父は右大臣 御幸の巻より左大臣とみゆ

196 大将の唐名 大樹

197 玉かつらの局へ上わたらせ給ふ也

198 紫をそむるには灰をさす物也

199 三位より紫を着用也 こなたには何とも無分別と也

200 九重は霞のふかき心也

201 かはかりは角 又少し也

202 風にも思召出給へと也

たちならふへきにほひなくとも

右近は玉につきて大将殿へ参る二月の頃雨降

つれくゝなるに源おほし出て右近かもとへ文つかはさる

かきたれてのとけき頃の春雨に

ふるさと人をいかにしのふや

〔玉返し〕なかめする軒のしづくに袖ぬれて」(44才)

うたかた人をしのはさらめや

藤やまふきのおもしろを見給ふにつけても

おもはずにゐてのなか道へたつとも

いはいはてそこふるやまふきの花

鳴のいとおほかるを御覧して御文つかはす源

おなしすにかへりしかひの見えぬかな

いかなる人か手ににきるらん

大将見給て御返しはかはりて

すかくれてかすにもあらぬかりの子を

いつかたにかはとりかくすへき

十一月にわか君うみ給ふ父おと、は思ふやうなる御」(44ウ)

すくせとかしつき聞え給ふ又いかなるおりにかありけん

203 源の事をおもひ出せと也

204 うたかたしはし也

205 少しも不忘と也

206 へへ思ふともこふともいはし山ふきの色に衣を染てきなまし

207 鳥のかいこかへりて後もとの巢に来ぬ物也

208 卑下ノ心也

殿上人あまた宰相分巻中将分巻なと女御分巻の御かたに参り物の
ねしらへて秋のゆふへのたゝならぬに彼近江君
人々のなかをしわけて出る給ふあなうたてなそ
と引いるれはさがなげににらみてはりゐたり声
いとさはやかにて夕霧をさして 近江の君

²⁰⁹ おきつ舟よるへなみちにたゝよはゝ

さほさしよらんとまりをしへよ

雲井の雁を恋給ふにかなはすはとの義也 夕霧

よるへなみ風のさはかすふな人も

おもはぬかたにいそつたひせず」(45才)

(挿絵)」(45ウ)